

## 血液凝固因子製剤による HIV 感染被害者の長期療養体制の整備に関する患者参加型研究

研究分担者  
遠藤 知之 北海道大学病院・血液内科 診療准教授

### 研究要旨

血液凝固因子製剤による HIV 感染被害者を対象として、運動機能の現状を評価し、運動機能の維持としてのリハビリテーションの有効性を検討することを目的として、リハビリ検診会を施行した。測定結果では、歩行速度および開眼閉脚起立時間が同年代と比較して著しく低下している症例が多くみられ、バランスを重視したリハビリや患者の運動機能に合わせた個別のリハビリ指導が必要と考えられた。患者アンケートの結果からは、リハビリ検診への興味や新しい知識が取得できたことの満足感などがうかがわれ、おおむね良好な評価であった。今後も本リハビリ検診会を継続していくことにより、運動機能の経年的な変化について解析していく予定である。

### A. 研究目的

血液凝固因子製剤による HIV 感染被害者の多くは血友病性関節症を有しており、長期療養において日常生活の妨げになっていることが多い。本研究では、HIV 感染被害者の運動機能の現状を評価し、運動機能の維持としてのリハビリテーションの有効性を検討することを目的とした。

### B. 研究方法

当院にてリハビリ検診会を開催し、北海道内の血液凝固因子製剤による HIV 感染被害者の運動機能の評価する。

#### <身体機能評価項目>

- ・ 関節可動域
- ・ 徒手筋力
- ・ 握力
- ・ 歩行速度
- ・ 開眼片脚起立時間
- ・ 3m 歩行 (TUG: timed up-and-go test)
- ・ ADL 聞き取り

#### <アンケート調査>

- ・ 患者にアンケートをおこない、検診会の満足度や感想について調査した。

#### (倫理面の配慮)

データの収集に際して、インフォームド Consentのもと、被検者の不利益にならないように万全の対策を立てた。データ解析の際には匿名性を保持し、データ管理に関しても秘匿性を保持した。

### C. 研究結果

#### <リハビリ検診会の開催>

日時: 平成 30 年 10 月 20 日 (土) 10 時～14 時

場所: 北海道大学病院リハビリテーション部 運動訓練室

#### プログラム

1. 講演「HIV 感染症・血友病診療の最近の話題」  
遠藤知之
2. 身体機能評価
3. 自助具・補装具相談
4. 昼食

参加患者人数：14 名（38 才～ 67 才）

スタッフ

- ・北海道大学病院：22 名
- ・札幌徳洲会病院：3 名
- ・国立国際医療研究センター：7 名
- ・はばたき福祉事業団：3 名
- ・自助具・装具業者：6 名

合計 41 名

<身体機能測定結果>

身体機能評価の結果を図 1～3 に示す。TUG test では基準値からの乖離は目立たなかったが、歩行速度は同年代の標準値と比較して低下している患者がほとんどであった。また、開眼片脚起立時間は、30 才代の患者は基準値を上回っていたが、40 才代以降の患者は著しく低下している症例が多かった。

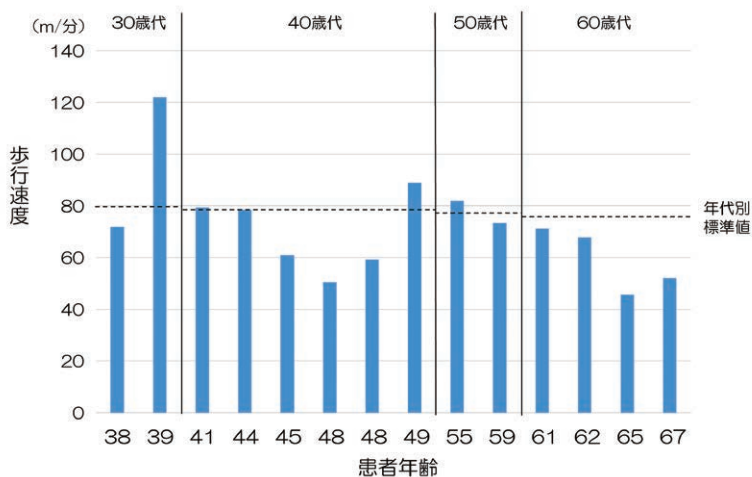


図 1 歩行速度

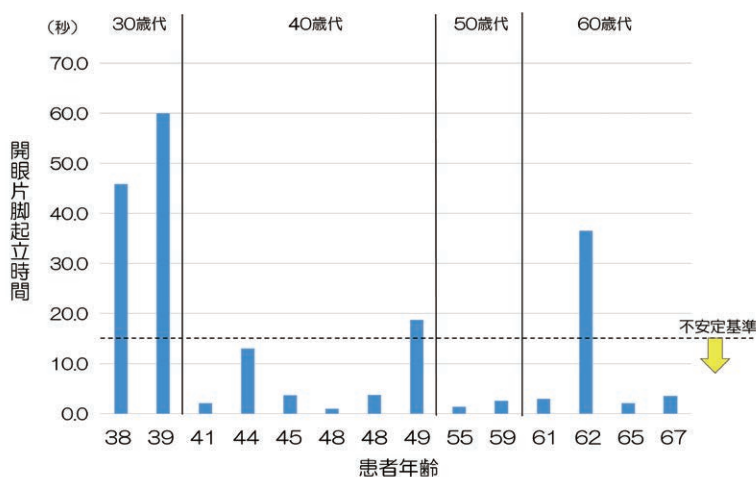


図 2 開眼片脚起立時間

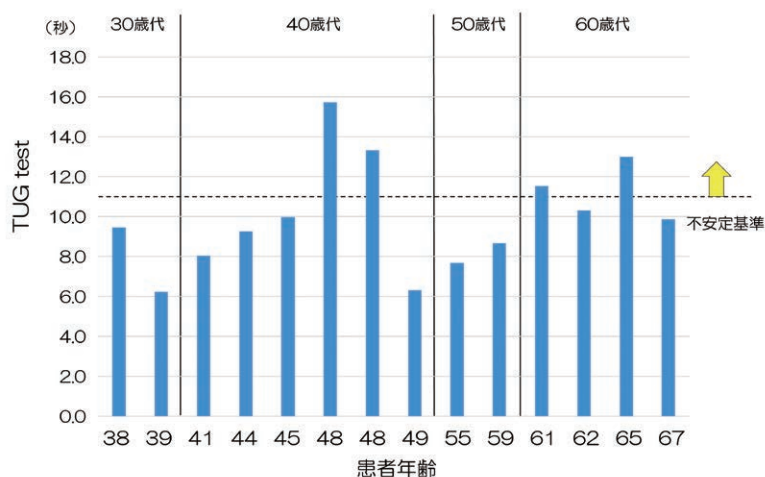


図 3 TUG test

### <アンケート結果>

リハビリ検診会の満足度の結果を図4に示す。1名が普通であったが、他の患者はすべて満足またはやや満足という結果だった。また、自由記載においても、「講演で新しい情報を聴くことができて良かった」「運動機能測定はやっていて面白かった」「昼食で久しぶりに会えた人がいて良かった」「今後も続けてほしい」など、良好な評価がほとんどであった。

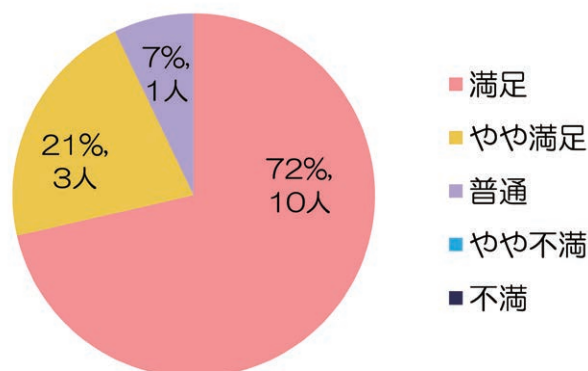


図4 リハビリ検診会の満足度

### D. 考察

昨年度当院では、血液凝固因子製剤による HIV 感染被害者を対象としてリハビリ勉強会を施行した。今年度はそれに引き続き実際の運動機能の評価を行った。北海道では秋から春にかけて、道路の凍結や積雪のために足場が不安定となることが多いことから、バランスの評価が重要と考え、開眼片脚起立時間と TUG test を組み込んだ。結果に示したごとく、40 歳以上では、開眼片脚起立時間が基準値を大きく下回っている患者が多く、冬道での転倒が危惧されるため、バランスを重視したリハビリが必要と考えられた。また、運動機能が低下している部分がそれぞれの患者で異なっており、リハビリの有効性を最大限高めるためには、患者個別のリハビリ指導が必要と考えられた。

今回のリハビリ検診会には、北海道大学病院のスタッフだけではなく、北海道の血友病ブロック拠点病院である札幌徳洲会病院からも人的支援が得られた。北海道大学病院は血友病診療地域中核病院となっており、血友病ブロック拠点病院の札幌徳洲会病院とは、患者紹介等の連携は行っていたものの、今回のリハビリ検診会において、直接対面での共同作業を行ったことにより、さらなる連携の強化に重要な役割を果たしたと考えられる。

患者アンケートの結果は、おおむね良好な評価だったが、各々のリハビリに対する意識や体の状況

を知るよい機会となっていたと考えられる。また、講演や資料の展示により新しい情報を得る機会となったことも高評価を得た一つの要因であったようだ。また、検診会の内容以外においても、患者間で近況などを報告し合う場面も散見され、患者間の交流の場にもなっていた。本検診会は、単なる運動機能の評価だけではなく、患者会のような役割も果たしていると考えられた。

今年度は多数の協力スタッフが得られたため無事運営できたが、ほぼ全員に役割が当たっており患者対応という面では、あまり余裕がなかったため、もう少し余裕をもって患者対応にあたるよう工夫が必要と考えられた。特に参加患者数が今年度以上に増えた場合の対策は必須と考えられる。今後リハビリ検診会を継続していくことにより、運動機能の経年的な変化について解析していく予定である。

### E. 結論

血液凝固因子製剤による HIV 感染被害者は、歩行速度やバランスの状態が悪く、その程度は個人によって大きな違いがみられるため、今後継続して運動機能の評価することによって、患者個別のリハビリメニューの作成を行うことが重要であると考えられた。

### F. 健康危険情報

なし

### G. 研究発表

#### 1. 論文発表

なし

#### 2. 学会発表

遠藤知之、後藤秀樹、荒隆英、吉岡康介、宮下直洋、笠原耕平、橋野聡、豊嶋崇徳：高感度 CRP による HIV 感染者の慢性炎症の評価 第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018 年 12 月 2 日 -4 日

### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

#### 1. 特許取得

#### 2. 実用新案登録

#### 3. その他

特になし